

木の祭り

木に白い美しい花がいっぱい咲きました。木は自分のすがたがこんなに美しくなったので、うれしくてたまりません。けれどだれひとり、美しいなあ」とほめてくれるものがないのでつまらないと思いました。木はめったに人のおらない緑の野原のまんなかにぼつんと立っていたのであります。

やわらかな風が木のすぐそばをとおって流れていきました。その風に木の花のにおいがふんわりのついでいきました。においは小川をわたって麦畑をこえて、崖^{がけ}つぶちをすべりおりて流れていきました。そしてとうとうちようちようがたくさんいるじゃがいも畑まで、流れてきました。

おや」とじゃがいもの葉の上にとまっていた一ぴきのちようが鼻をうごかしていいました。なんてよいにおいでしよう、ああうっとりしてしまおう。」

どこかで花がさいたのですね。」と、別の葉にとまっていたちようがいいました。ぎっと原っぱのまんなかのあの木に花がさいたのですよ。」

それからつぎつぎと、じゃがいも畑にいたちようちようは風につてきたころよにおいに気がついて、おや」おや」といったのであります。

ちようちようは花のにおいがとてもすきでしたので、こんなによいにおいがしてくるのに、それをうっちゃっておくわけにはまいりません。そこでちようちようたちはみんなでそうだんをして、木のところへやっっていくことにきめました。そして木のためにみんなで祭りをしてあげようということになりました。

そこではねにもようのあるいちばん大きなちようちようを先にして、白いや黄色いのや、かれた木の葉みたいなのや、小さな小さなしじみみたいなのや、いろいろなちようちようがにおいの流れてくる方へひらひらと飛んでいきました。崖^{がけ}つぶちをのぼって麦畑をこえて、小川をわたって飛んでいきました。

ところが中でいちばん小さかったしじみちようははねがあまりつよくなかったので、小川のふちで休まなければなりません。しじみちようが小川のふちの水草の葉にとまってやすんでいますと、となりの葉のうらにみたことのない虫が一ぴきうつらうつらしていることに気がつきました。

あなたはだあれ。」としじみちようがききました。

ほたるです。」とその虫は眼^めをさまして答えました。

原っぱのまんなかの木さんのところでお祭りがありますよ。あなたもいらっしやい。」としじみちようがさそいました。ほたるが、

でも、私は夜の虫だから、みんなが仲間なかまにしてくれないでしょう。」といいました。しじみちようは、

そんなことはありません。」と行って、いろいろにすすめて、とうとうほたるをつれてきました。

なんて楽しいお祭りでしょう。ちようちようたちは木のまわりを大きなぼたん雪のようにとびまわって、つかれると白い花にとまり、おいしい蜜みつをお腹なかいっぱいごちそうになるのであります。けれど光がうすくなって夕方になってしまいました。みんなは、

もっと遊んでいたい。けどもうじきまっ暗になるから。」とためいきをつきました。するとほたるは小川のふちへとんで行って、自分の仲間なかまをどっさりつれてきました。一つ一つのほたるが一つ一つの花の中にとまりました。まるで小さいちようちんが木にいったいともされたようなぐあいでした。そこでちようちようたちはたいへんよろこんで夜おそくまで遊びました。

底本＊新美南吉童話集 1 こん狐」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1996年9月1日第10刷発行

入力＊安城市中央図書館職員